

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成19年度～20年度

課題番号：19520522

研究課題名（和文） UG-based SLAによる項目別英語文法指導法の開発

研究課題名（英文） The development of itemized English grammar instruction on the basis of UG-based SLA

研究代表者 横田秀樹

研究成果の概要：

まず、これまで言語理論（特に普遍文法/UG）がどのように外国語指導法に応用されてきたのか文献調査を行ったが、そのほとんどが言語理論で用いられる「説明」を授業や指導の中で利用するといったものであった。しかし、「言語理論の説明」の説明は複雑であり、確かに現象の理解を助けることにはなるが、それらが習得につながるという保証はない。従って、本研究では、「説明」を利用するのではなく、言語理論から導き出される文法指導法を探ることにした。次に、理論的枠組が適切な文法指導法を予測するかを調べるため、文献調査と実験研究を中心に行った。具体的には、Missing Surface Inflection Hypothesis（MSIH; Haznedar & Schwartz 1997他）とRepresentational Deficit Hypothesis（RDH; Hawkins 2005他）の枠組みを、wh疑問文とbe動詞を用い検証した。本実証研究および過去の文献研究（例：自然習得順序など）を基に、MSIHとRDHを見直したところ、それらは部分的には支持できるが、具体的な文法指導法を導き出すほどの予測力は持ち合わせていないと考えられた。一方、Zobl（1995他）が提案する「機能範疇」に基づく自然習得順序の説明が直接文法指導の効果を「予測する」上で多くの示唆を含んでいることが分かってきた。また、解釈不可能素性のみを持つ項目と解釈可能素性と解釈不可能素性の両者を持ち合わせるものとの区別、そして機能範疇に関わる素性の数、転移の問題なども、直接文法指導が役立つ項目とそうでない項目を予測する可能性が高いことが明らかになってきた（その検証の結果の一つは、第35回全国英語教育学会にて発表の予定である）。さらに、それらを検証すべく、できる限り多くの文法項目の直接指導の効果を調査が必要であることも分かってきたため、本研究のテーマを研究継続し、全国英語教育学会課題別フォーラムの研究チームとして4名のメンバーで同テーマを追究することとなった。また、さらにUGばかりでなく他の理論をベースにした第二言語習得研究の英語教育への応用として研究プロジェクト（中部地区英語教育学会課題別研究プロジェクト「第二言語習得研究の成果とその応用」）も同時に進めている。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|---------|-----------|
| 19年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 20年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,400,000 | 720,000 | 3,120,000 |

研究分野：基盤研究（C）

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教授法、学習理論、第二言語習得、文法指導

1. 研究開始当初の背景

これまでの英語教授法は特定の文法項目（過去形など）の実験に基づいて提案されてきたものがほとんどであるが、他の文法項目でも同様のことが言えるのかははっきりしない。また、言語理論に基づく第二言語習得研究を英語教育に応用した研究はほとんどなされていない。従って、本研究では言語理論の一つである普遍文法(Universal Grammar/UG)を基盤として、その指導法を探ることにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は第一に、UG-based SLA のアプローチから一定の習得の傾向（指導の判断基盤）を特定することである。第二に文法指導を実際に行うことで効果を検証する。そして、そこから文法項目別に指導法（明示的指導、暗示的指導、無処置）を導き出す。このように、指導法を探るためのアプローチを確立するとともに、文法指導法のプロトタイプを作ることを目的とする。

3. 研究の方法

文献および研究協力者の助言を基に最新のUG-based SLA の動向から理論的基盤を固める。そして、初級学習者、中級学習者、上級学習者に分け、特定の文法項目（do-support、助動詞、wh 疑問文、時制など）を抽出するタスクや学習者コーパスを用い、それぞれ項目別の習得率について調査した。

4. 研究成果

まず、これまでの言語理論をベースとした指導法の特徴をまとめた。第二に、UG-based SLA におけるいくつかの仮説から文法指導

の判断基盤を特定するために日本人英語学習者の習得の傾向を調査し、機能範疇を中心としたアプローチが明示的指導の効果を予測する可能性が高いことがわかった。この研究は、共同研究という形でさらに進展中である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

「Mapping and spellout problems in Japanese learners' English wh-questions」
『JACET Chubu Journal Vol. 4』pp.39-55 (2007)

「UG-based SLA と英語教育研究」
『中部地区英語教育学会紀要第 37 号』pp.33-40 (2008)

「日本人英語学習者による be 動詞の習得 - 解釈可能素性と解釈不可能素性 -」
『LET 中部支部研究紀要第 19 号』(2008)

〔学会発表〕（計 4 件）

「日本人英語学習者による英語 WH 疑問文の探査子と着地点：予備実験の結果から」
第 7 回日本第二言語習得学会年次大会
2007 年 5 月 20 日 静岡県立大学

「UG-based SLA と英語教育研究」
第 36 回中部地区英語教育学会 三重大会
2007 年 6 月 23 日 三重大学

「日本人英語学習者による be 動詞の習得 -

解釈可能素性と解釈不可能素性 -」
LET 中部支部 第 70 回支部研究大会
2007 年 12 月 1 日 一宮女子短期大学

「第二言語習得順序と説明的妥当性」
第 37 回中部地区英語教育学会 長野大
会
2008 年 6 月 29 日 清泉女学院大学・清泉女学
院短期大学

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 件）

○取得状況（計 件）

〔その他〕

6. 研究組織
(1) 研究代表者

横田 秀樹

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

Andrew Radford (University of Essex)